"Modern Populism" and Political Changes in Spain: A Study of Podemos

NIITSU Yoshitaro

Keywords: populism; Podemos; modern Spain; political changes

Abstract

This paper examines whether Podemos, a new Spanish political influence that originated as a grass-roots movement, should be considered as being a "populism" movement or not.

In the Spanish general re-election (June 26, 2016), two major political parties (Partido Popular [PP] and Partido Socialista Obrero Español [PSOE]) lost significant popular support, while two new anti-establishment political influences (Podemos and Ciudadanos) did remarkably well, as they did in the previous general election of December 20, 2015. For the general re-election (2016), Podemos formed a left-wing electoral alliance with Izquierda Unida named "Unidos Podemos." A public opinion poll anticipated that Unidos Podemos would be the leading opposition party, but the party was identified with the Chávez Administration (Venezuela) and Brexit (June 23, 2016), as well as being labeled "populism." As a result, Unidos Podemos was forced into third position.

An anti-establishment influence such as Podemos is often described as populism, yet history tells us to understand that there is a difference between "traditional" and "modern populism." "Traditional" populism strives to gain support from the "people" by basing itself on a specific class or ideology. On the other hand, "modern populism" creates a new frame for the "people."

Today, both center-left and center-right parties have generally shifted their traditional policies towards the "center." As a consequence, the choices offered to the electorates are reduced and many conclude that

"modern populism" is a genuine alternative. Moreover, many voters have no way of knowing what policies actually are in their interests, owing to globalization and the post-industrial landscape. Therefore, "modern populism" creates a homogeneous aggregate that reflects this unified will of the "people."

Nevertheless, while Podemos has gradually transformed its radical policies into more realistic, namely (traditional) social-democratic policies, many electors consider the party too extreme because center-left parties have moved their policies into the "center." This is why Podemos is frequently branded as "populist."

Podemos considers it's very important that people understand the existence of diverse policy choices and are thus provided with opportunities for political debate, and Podemos strives to facilitate people establishing their own understanding of politics and discovering a shared slogan through its movement. As Podemos has developed by bringing together various groups of citizens while respecting the originality of each body, it differs from an intermediate organization, which regulates respective interest in representative democracy. In addition, Podemos doesn't represent any particular class or ideology, but aims to work with all participants to determine what would be in their own political interests. Therefore, in some respects, Podemos is incompatible with "modern populism," which only emphasizes homogeneity, rather than pluralism.

Therefore, I conclude that although Podemos currently includes some elements of an intermediate organization of a representative democracy and an example of "modern populism," it is in fact a "new or modern intermediate organization," which differs from the two former categories.

〈研究ノート〉

「現代ポピュリズム」論とスペインにおける政治変化
―ポデーモスに関する一考察―

新 津 吉 太 郎

はじめに

“And as these real problems have been neglected, alternative visions of the world have pressed forward both in the wealthiest countries and in the poorest: Religious fundamentalism… aggressive nationalism; a crude populism――sometimes from the far left, but more often from the far right――which seeks to restore what they believe was a better, simpler age free of outside contamination.”

これは、第 71 回国連総会（2016 年 9 月 20 日）での、オバマ米大統領の一般演説において、「ポピュリズム」に関して言及された部分の引用である[1)]。経済危機、移民問題、失業や格差、テロリズムなど、今日の様々な問題に対処することができない既存政党を批判する新しい政治勢力が、近年、既成の体制に不満を抱く「人々」の支持を集めて台頭してきている。このような新しい政治勢力は、「ポピュリズム」として説明される傾向にある[2)]。

1） ホワイトハウスのウェブページより引用（最終閲覧日：2016 年 10 月 31 日）。
https://www.whitehouse.gov/the-press-office/2016/09/20/address-president-obama-71st-session-united-nations-general-assembly

1980年代以降、ヨーロッパにおいて反エリート・反エスタブリッシュメント、移民排斥や福祉ショーヴィニズムを掲げた右派ポピュリズム政党が台頭した。また、このような右派ポピュリズム政党だけでなく、既存政党が用いる政治手法にも、ポピュリズム的な要素が見られることが多くなってきた。さらに、ヨーロッパの中道左派・中道右派政党が、イデオロギー的な主張を抑えた現実主義をとるようになり、政策的な選択肢が狭められたため、ポピュリズム勢力が「新たなオルタナティブ」だと捉えられるようになった。

オバマ大統領の演説でも言及されたように、近年、多くの国々で躍進が目立つのは、右派ポピュリズムである。世界的な経済危機による経済的・社会的「格差」や失業問題、シリア内戦・中東情勢の悪化によるEUへの大量の移民問題に対し、右派ポピュリズムは「ゼノフォビア」や福祉ショーヴィニズムを掲げ、既成の体制に不満をもつ「人々」から多くの支持を獲得している。

とはいえ、既存政党を批判し、「人々」の支持を集めているのは「右派」だけではない。反エスタブリッシュメント、反EU（特に緊縮財政政策に関して）を掲げて政権を獲得したギリシャの「急進左派連合（Syriza）」や、急進左派連合と同じような主張をしているスペインの「ポデーモス（Podemos[3]）」が、既存政党にとって代わる新しい「左派」勢力として台頭している。

ポデーモスは、スペインで行われた2回の総選挙（2015年12月、2016年6月）で既存の二大政党に大きく迫った。既存政党を批判し、既成の体制に不満をもつ「人々」の多くの支持を獲得したポデーモスの躍進が、スペインにおける政治変化の要因の一つになった。とはいえポデーモスが、

2）例えば、2016年にはイギリス独立党（UKIP）や、米大統領選挙をめぐる共和党のトランプ候補、民主党のサンダース議員の動向も「ポピュリズム」として説明される場合がある。
3）「我々はできる」という意味。2014年1月結党。ポデーモスの詳細は後述する。

他のヨーロッパ諸国で既存政党を批判して台頭している「右派ポピュリズム」と同じ枠組みで説明されてよいのであろうか。本稿は、試論であるが、一般的には「左派ポピュリズム」と説明されるポデーモスを、「ポピュリズム」と位置づけるのは適切かどうか、考察するものである。

1. スペイン再総選挙（2016 年 6 月 26 日）

2016 年 6 月 26 日、スペインで再総選挙が行われた。2015 年 12 月 20 日に行われた総選挙では、既存の二大政党〔国民党（PP）、社会労働党（PSOE）〕が大幅に得票数・議席数を失い、新しい政治勢力（ポデーモス、シウダダーノス[4]）が台頭した。どの政党も、単独過半数の議席を獲得することができなかった。各政党は再選挙を防ぎ、何らかの形で政権を樹立させるため、連立交渉を重ねた。しかし、政策方針や、独立の気運が高まるカタルーニャ自治州の情勢などを巡って、連立協議は頓挫した。そのため、議会が解散され、再選挙の運びとなった[5]。

2015 年 12 月の総選挙では、二大政党制〔二大政党（PP、PSOE）＋少数派政党〕が崩壊し、複数政党制〔四大政党（PP、PSOE、ポデーモス、シウダダーノス）＋少数派政党〕が成立した。四大政党を「左派ブロック（PSOE、ポデーモス）」「右派ブロック（PP、シウダダーノス）」という観点で見れば、従来の「左派ブロック＋右派ブロック＋少数派政党」という

4）Ciudadanos（市民たち）という意味。2006 年 3 月結党。シウダダーノスはもともと、カタルーニャ・ナショナリズムに反対を唱える市民運動に端を発す、カタルーニャ自治州の地方政党だった。近年、カタルーニャはスペインからの分離独立の動きを強めており、その動きが、カタルーニャ以外の地域の有権者の反感を買ったため、シウダダーノスは全国規模で支持を獲得することができるようになった。また、ここ数年で次々と明るみになった既存政党（主に PP）による汚職・腐敗を強く批判したことも、シウダダーノスの支持の拡大につながったと思われる。

5）2015 年にスペインで行われた一連の選挙（統一地方選挙、カタルーニャ州議会選挙、総選挙）については、拙稿を参照。新津吉太郎（2016）「現代スペインにおける政治変化――スペイン総選挙・地方選挙（2015 年）の結果分析」『人文研究』（189）、神奈川大学人文学会、131-166 頁。

構図と変わらないように見える[6)]。しかし、社会階層に基づいた支持基盤がある既存の政党と、階層を超えた「個」に基づき、市民運動に端を発す新たな政治勢力では、たとえ同じブロックに属していても、その質や理念が異なるため、同じ「左派」「右派」として位置づけることはできないだろう。また、カタルーニャの分離独立の動きへの態度や、次々と明らかにされる（主に PP による）汚職・腐敗事件を巡って、同じブロック内でさえ連立交渉が難航した。

以上のような経緯で、再総選挙（2016 年 6 月）が実施されることになったわけだが、事前の調査で、再選挙になっても、どの政党も単独過半数の議席は獲得できないとの予想が出された[7)]。しかし、この再総選挙には、前回（2015 年 12 月）の総選挙とは異なる点があった。ポデーモスが統一左翼[8)]（IU）と選挙連合を結成し、「ウニードス・ポデーモス（Unidos Podemos[9)]）」として選挙戦に臨むことになったのである[10)]。ポデーモスには、IU との人的なつながりが以前からあった。しかしポデーモスは、IU が市民運動を「指導」しようとする態度に反感を抱いていた。そのため、「既存の」左翼勢力とは一線を画していた[11)]。ではなぜ、ポデーモスは IU と選挙連合を組むことになったのであろう。

2015 年 12 月の総選挙後、各党は連立交渉を重ねた。PP は PSOE との大連立を模索し、長年続いてきた二大政党制を維持しようとしたが、PSOE は PP の提案を拒絶した。これを受けてポデーモスは、「左派＋地

6） この点に関しては、以下を参照。加藤伸吾（2016）「2015 年 2 つの選挙に見るスペイン政治とカタルーニャ政治の連関形態の変容」『EUSI Commentary』vol. 68（2016 年 2 月 10 日）。

7） *El País*, 9 de junio de 2016; *Expansión*, 9 de junio de 2016.

8） Izquierda Unida: スペイン共産党を中心に、左翼政党や環境左派などを連合した政党。

9） 「結束した我々はできる」という意味。

10） *El Periódico*, 20 de abril de 2016; *El País*, 16 de mayo de 2016.

11） 野上和裕（2015）「ポデモス擡頭のスペイン政治における意味」『法学会雑誌』（首都大学東京）56（1）、201 頁。また、ポデーモス代表のイグレシアスによる既存の「左翼」への批判は、以下も参照。Pablo Iglesias（2015）*Una nueva Transición: Materiales del año del cambio*, Madrid: Akal, 2.ª edición, pp. 75–78.

域ナショナリスト勢力」で連立政権を樹立する案をPSOEに提示した[12)]。このとき争点になったのが、独立の動きを強めていたカタルーニャへの態度だった。ポデーモスは、カタルーニャがスペインから分離独立することには反対している。しかし、カタルーニャの自己決定権は擁護しているので、独立の是非を問う住民投票を実施することには賛成している。一方PSOEは、カタルーニャの独立には反対し、住民投票の実施も認めない立場である[13)]。PSOEは主にこの点で妥協できず、ポデーモスの提案を拒否し、シウダダーノスと協力して組閣を目指した[14)]。

ポデーモスは、左派や地域ナショナリスト勢力と交渉しようとしないPSOEの態度を前にして、IUと選挙連合を結成し、PSOEを抜いて自らが第2党となり、PSOEを交渉の席につかせようとしたのだ。ポデーモスとIUは、スペインの現行の選挙制度を考慮し、会派がまとまれば、得票率以上に議席数を獲得することができると見込んだ。

このような経緯で結成されたウニードス・ポデーモスは、もし政権を獲得すれば、EUから課されている緊縮財政に、全面的に立ち向かうことを表明した。また、たとえ野党になっても、現在のEUに立ち向かい、街頭で反緊縮を訴える運動を積極的に展開することも明らかにした[15)]。

事前の調査で、ウニードス・ポデーモスはPSOEを抜き、第2党になることが予想されたわけだが、これにはいくつかの理由があった。まずは先述の通り、選挙制度がウニードス・ポデーモスに有利に働くであろう、と予想されたことである。2点目は、国王に組閣を要請されたPSOEが、結局は組閣に失敗し、再選挙になってしまったことに対する、有権者から

12）　*La Vanguardia*, 4 de marzo de 2016.

13）　この点に関しては、PSOE内部にも対立がある。すなわち、憲法改正によってスペインに連邦制を導入し、カタルーニャの権限を強化しようとする者たちと、スペインの揺るぎない統一を重視し、カタルーニャへの更なる権限委譲を拒んでいる者たちがいる。

14）　*El Mundo*, 5 de marzo de 2016.

15）　*Vozpópuli*, 23 de mayo de 2016.

の批判であろう。そして、PP（一部は PSOE）による汚職・腐敗事件が次々と明らかになり、既存の二大政党への支持がさらに低下したことも考えられる。

このような状況で PP、シウダダーノス、PSOE は、ウニードス・ポデーモスへの批判を、以前にも増して強めていった[16)]。特に、ポデーモスがベネズエラ政府から資金援助を受けたのではないか、という疑惑を引き合いに出し[17)]、ポデーモスとチャベス政権・マドゥーロ政権とを結びつけ、「極左」「ポピュリスト」というレッテルを貼り、イメージの低下を狙った。

スペイン再総選挙の 3 日前（2016 年 6 月 23 日）、イギリスの EU 離脱を問う国民投票が行われた。大方の予想に反して「離脱派」が勝利し、イギリスが EU から離脱するプロセスを開始することが現実になった。イギリスの国民投票の結果は、3 日後のスペイン再総選挙にも大きな影響を与えた。

「ブレグジット[18)]」が、ポデーモスを不利にさせたのであろう[19)]。ポデーモスは、独立の気運が高まっているカタルーニャと同様、分離独立の是非を問う「住民投票 referéndum」を合法化し、諸地域の自決権を尊重しようとしている。スペインの有権者にとって、カタルーニャやバスク自治州の住民投票は、イギリスの国民投票を連想させる。また、ポデーモスと結びつけて説明されるベネズエラのチャベス政権は、国民投票を多用する政治手法をとっていた。そのため、ポデーモス、チャベス政権、ブレグジットのイメージが有権者の頭のなかで重なり、有権者が抱くポデーモス

16） *El País*, 26 de mayo de 2016.
17） *El Mundo*, 5 de abril de 2016; *La Vanguardia*, 5 de abril de 2016.
18） Brexit:「イギリスが EU を離脱する」という意味で、「Britain（イギリス）」+「exit（立ち去ること）」をかけ合わせた造語。
19） *El País*, 24 de junio de 2016; *El Mundo*, 24 de junio de 2016; *El Economista*, 27 de junio de 2016.

のイメージは、さらに悪いものになったと思われる。

イギリスの国民投票の恩恵を最も受けたのがPPだった。表（巻末に付録）の通り、PPは約70万票増・14議席増で、単独過半数には届かなかったものの、第1党の座を維持した。PSOE（5議席減）、シウダダーノス（8議席減）、バスク・ナショナリスト党（1議席減）が失った議席は、すべてPPの議席になった。この再総選挙で議席数を増やしたのは、PPだけだった。

ウニードス・ポデーモスは71議席を獲得したが、2015年12月の総選挙でポデーモス（69議席）、IU（2議席）が獲得した議席数の合計と変わっていない。さらに得票数を見ると、2015年の総選挙で両党が獲得した得票数の合計より、約100万票も失った。ウニードス・ポデーモスの支持が予想より伸びなかった要因は、先述の通りである。EU諸国との関係の重要性を理解しているスペインの有権者は、イギリスの国民投票の結果を目の当たりにして、変革より現状維持を望んだのではなかろうか。

以上のように、2016年6月のスペイン再総選挙は、2015年12月の総選挙とあまり変わらない結果になった。2015年の総選挙と同様、既存の二大政党が大きく後退し、既存政党ならびに既成の体制を批判する新しい政治勢力の躍進が目立った。近年、このように反エスタブリッシュメントを掲げる新しい政治勢力は、「ポピュリズム」として説明される傾向にある。特に、スペインの新しい政治勢力として台頭したポデーモスは「急進左派」、場合によっては「左派ポピュリズム」だとみなされるわけだが、ポデーモスを「ポピュリズム」と位置づけるのは適切なのであろうか。次の節では、ポピュリズムの歴史を概観し、現代のポピュリズムが、どのような背景で登場してきたのかを整理する。

2. ポピュリズムの歴史的先例

「ポピュリズム」という言葉は、概して積極的な意味では使われていない。「人気取り」「大衆迎合」というレッテルを貼られ、民主主義に害を及ぼすものだと捉えられている。しかし、民主主義の根本は「人々[20]（people）」に主権があることである。そのため、何らかの原因で既存の政治が行き詰まったとき、ポピュリズムが生じるのは当然だと言えるのかもしれない。というのも、代表民主制において、「代表する者」が「人々」（代表される者）から支持を得て、「人々」の意思を体現しようとするのは、彼らの義務であるからだ。

歴史的に見ても、ポピュリズムが台頭するのは、その時代の既存の政治が行き詰まり、「人々」が、自分たちの意思が政治に反映されていない、という閉塞感を抱いたときである。

ポピュリズムが大きな影響力をもって現れた最初の事例は、1891 年に結成された米国の「人民党（People's Party）」である[21]。19 世紀後半、米国の農業は技術革新によって生産性が向上し、規模が大きくなっていった。しかし、1870 年代の不況によって穀物価格が下落し、多くの農民が苦境に立たされた。この不満の受け皿になったのが人民党だった。人民党は、当時のデフレ政策とは反対の政策（貸付制度の拡充、インフラの公営

20） ポピュリズムの概念の根拠とされる「ピープル（people）」は、「人民」「民衆」と訳されることが多い。しかし、吉田（2011）が指摘するように、「人民」は主に共産主義のイデオロギーの文脈で用いられる左翼用語であり、「民衆」は民俗学に起源をもつ言葉なので、どちらもポピュリズムを表す言葉として、ふさわしくないと見受けられる。「ピープル」をどのような日本語で表すのが適切なのか、それ自体が大きなテーマになるだろう。とはいえ、これは本稿が扱う範囲を大きく超えるものである。よって、本稿ではさしあたり「ピープル」を「人々」と記述することにした。吉田徹（2011）『ポピュリズムを考える――民主主義への再入門』NHK 出版、15-16 頁。

21） 本稿が試みる、ポピュリズムの歴史的先例の区分の一部分は、以下を参照した。高橋進・石田徹編（2013）『ポピュリズム時代のデモクラシー――ヨーロッパからの考察』法律文化社、i-iii 頁。

化など）を掲げ、特に小作農の支持を獲得していった。また、労働運動とも連携をとり、既存の二大政党（共和党、民主党）を批判する、有力な第三勢力として台頭した。人民党は、民主党が彼らの主張を部分的に取り入れたこともあり、20 世紀に入ると内部分裂によって組織が解体してしまう。とはいえ人民党は、二大政党に取り込まれなかった農民や労働者、さらに女性や黒人を組織化し、のちのニューディール政策の先駆けにもなる運動を展開したとされている[22)]。

第 2 の歴史的先例は、1930～70 年代に、様々な途上国で台頭したポピュリズムである。この途上国型のポピュリズムは、資本主義が先進国から途上国へ波及し、工業化が進行していく過程で生じたものである。体制に取り込めていない労働者階級を政治的・社会的に統合し、「国家・労働者階級・産業ブルジョワジー・中間層」が同盟したコーポラティズムを志向した。特に産業資本家層が主導した場合が多い。そして、カリスマ性の高い指導者が登場すると、特に運動が高揚して政権を獲得する傾向があった。メキシコのカルデナス政権（1934～40 年）、ブラジルのヴァルガス政権（1930～45、1951～54 年）、アルゼンチンのペロン政権（1946～55、1973～74 年）など、ラテンアメリカ諸国に次々とポピュリズム型の政権が成立した。途上国型のポピュリズムが台頭した国々では、米国やフランスが経験した市民革命を経過していない。これらの国々において、市民革命に代わって近代化を達成しようする（特に大土地所有制を打破し、輸入代替工業化を達成する）ものが、ポピュリズムだったのである[23)]。なお、途上国型のポピュリズム政権は、ラテンアメリカ諸国に固有のものではな

22）　吉田（2016）「ポピュリズムとは何か――民の声は神の声（Vox Populi, Vox Dei）？」杉田敦編『グローバル化のなかの政治』岩波書店、108 頁。

23）　ラテンアメリカにおける途上国型のポピュリズムについては以下を参照。松下洋（1987）『ペロニズム・権威主義と従属――ラテンアメリカの政治外交研究』有信堂。松下洌（1993）『現代ラテンアメリカの政治と社会』日本経済評論社。小倉英敬（2012）『マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレ――1920 年代ペルー社会思想史試論』新泉社。

く、インドネシアのスカルノ政権（1945～67 年）や、エジプトのナセル政権（1954～62、1967～70 年）など、アジアやアフリカにも登場した。

1970 年代までポピュリズムは、工業化への移行段階にある国に特有の現象だとされていた。しかし 1980 年代以降、ポピュリズムは先進工業国および民主主義が成熟した国家においても見られるようになった[24)]。

第 3 の例は、ポピュリズム政党に変容した、従来の政治システムの枠外に位置していた右翼勢力である。そしてこの第 3 の例こそ、今日のヨーロッパにおいて台頭し、現在の代表民主制のあり方を問いかけているポピュリズム勢力である。東西冷戦終結後、極右とされていた政治勢力は、カリスマ的な指導者のもとで、「反共」路線を前面に押し出すことを避け、議会制民主主義や自由主義の原理を受け入れて穏健化した。この意味で「新しい」右派ポピュリズムといえるだろう。この第 3 の例は、それまで一辺倒だった暴力行為や反体制の姿勢を改めるとともに、移民や失業問題など、具体的な政策を掲げるようになった。そして、反政治・反エリート主義を掲げ、「人々」に主権を返還することを唱えて支持を拡大し、議会へ進出していった。また、第 3 の例のイデオロギーは、小さな政府を目指すという意味で新自由主義を否定はしないが、反グローバリズムの色がより濃く見られる。

そして本稿では、21 世紀に入り、ラテンアメリカ諸国で多く見られる

24） 工業化がすでに達成された段階において生じるポピュリズムとして、本稿で取り上げるもの以外によく引き合いに出されているのは、ペルーのフジモリ政権に代表される「ネオ・ポピュリズム」や、イギリスのサッチャー首相が用いた政治手法である。ネオ・ポピュリズムは、新自由主義政策を遂行する過程で登場した政治スタイルである。政治制度や中間組織を介さず、それらを非難するとともに、極貧層への「バラマキ」や、有権者に直接訴えて関係を築く手法で政権を獲得した。サッチャーは、保守党と労働党の戦後コンセンサスを破棄し、労働者階級の闘争基盤を解体して、普通の「人々」を創り出した。この手法は、「人々」が運動を展開して自分たちの代表制を獲得しようとするのではなく、「人々」に代表制があることを強調して「上から」訴えるものだった。ネオ・ポピュリズムもサッチャーの手法も、ポピュリズム的な要素は含まれるが、それはあくまで「手法」であり、両者はポピュリズムというより、新保守主義と新自由主義の側面が強い。よって、本稿でこの 2 つをポピュリズムと定義することは、さしあたり留保する。

ようになった左派・中道左派政権[25]の一部を、第4の例とする。というのも、21世紀になって台頭したこれらの左派・中道左派政権の一部を「ポピュリズム」だと捉える見方も存在するからである[26]。この第4の例の左派・中道左派政権が成立した共通の背景は、1990年代にラテンアメリカに押し寄せた新自由主義への反発である。とはいえこれらの左派・中道左派政権は、新自由主義政策への姿勢に関して、大きく二つの流れに分けられる。一方は、新自由主義は貧困問題を解決できず、格差を維持・拡大させたとして、特に「反米」と反新自由主義的な言説を用いて成立した急進左派政権である。もう一方は、新自由主義をネガティブに捉えつつも、経済政策に関しては従来の新自由主義路線を引き継ぐ、もしくは反新自由主義の言説を穏健化させることで成立した中道左派政権である。

急進左派政権は、既成の政治制度が機能不全を起こす過程で成立した政権である。一方、中道左派政権は、安定した既存の体制内において成立した政権だといえる。近年、ポピュリズムという言葉で説明されることもあるのは、急進左派政権である。ボリビアのモラーレス政権（2006年～）、エクアドルのコレア政権（2007年～）、そして特に引き合いに出されるのが、ベネズエラのチャベス政権（1999～2013年）およびマドゥーロ政権（2013年～）である。チャベスは、既存の二大政党が有権者の多数の利益を代表しなくなっていた状況で、反新自由主義、特に「反米」の言説を団結のためのキーワードとして前面に押し出した。そして、ナショナリズムを掲げ、所得再配分による社会正義を達成するための改革路線を掲げた。チャベスは、ポピュリズムを機能的にとらえ、政党などの中間組織を省略

25）　2000年代にラテンアメリカで台頭した左派・中道左派政権については、主に以下を参照。Carlos de la Torre（ed.）（2015）*The Promise and Perils of Populism: Global Perspectives*, Kentucky: Kentucky University Press; 遅野井茂雄・宇佐見耕一編（2008）『21世紀ラテンアメリカの左派政権――虚像と実像』アジア経済研究所。

26）　Ignacio Sotelo, “El populismo bolivariano”（*El País*, 30 de junio de 2014）; 吉田（2016）前掲論文など。

し、それらをエリート主義的なものだと否定し、直接民主制を志向した。チャベスは「人々」の心をとらえる強いカリスマをもったリーダーとして登場し、「人々」と直接向き合い、関係を築く戦略を展開した。また先述の通り、チャベスは国民投票および、様々な選挙を多用する、直接民主制を目指した。まず、「人々」（特に極貧層）に有利な政策を打ち出す「バラマキ」を行い、支持を集める。政権が掲げた政策が「人々」の支持を集めていることを、国民投票や様々な選挙で証明することで、成功を収めてきた。

ここまで、ポピュリズムの歴史を概観してきたが、本稿では本節で指摘した第１・第２の「歴史的先例」と、第３・第４の「例」を、別のポピュリズムとして位置づけたい。今日の世界は、資本家階級と労働者階級の関係が不明確になり、（以前のような）激しい対立がなくなった「ポスト工業化社会」だと言えよう。さらに、冷戦終結後はイデオロギーの対立が薄まった（先述の通り、例えば「極右」も「反共」路線を前面に出さなくなった）。この点に関して、特定の階層・階級やイデオロギーに基づいて「人々」の支持を集めようとした第１・第２の歴史的先例と、社会の個別化・不安定化が強まり、現状の把握が困難な状況で「人々」という枠組みを創り出す、第３・第４の例には大きな違いがある。以上のことをふまえ、本稿はこの第３・第４の例を、「現代ポピュリズム」と位置づける。

3.「現代ポピュリズム」型の「右派」の台頭

先述の通り、今日のヨーロッパでは、経済危機や移民問題に端を発す諸問題に対処できない既存政党を批判し、エリートとは異なる方法を提示して諸問題の解決を図ろうとする「現代ポピュリズム」型の「右派」（本稿では、先述の「第３の例」にあたる）が、「人々」の支持を集め台頭して

きている。本節では、この「現代ポピュリズム」型の右派が、どのように位置づけられるのかを整理し、なぜこの勢力が「ポピュリズム」だと説明されているのかについて、考察する[27]。なお、「現代ポピュリズム」型の右派勢力は、ナショナリズムを主張し、自国の独自性・優位性を前面に出す傾向にあるため、それぞれの政党を比較考察するのは容易ではない。また、これらの政党の国際的な連携に関して、欧州議会などで、ある程度の協同は存在するが、連合組織の形成には至っていない。とはいえ、「現代ポピュリズム」型の右派に関して、第二次大戦後に生じた、右翼勢力の台頭の歴史的な流れを追えば、その理解が容易になると思われる。

第二次大戦後、右翼勢力が台頭した第1の現象は、「極右」として位置づけられる勢力、すなわち第二次大戦後から1950年代初頭の、ネオ・ファシズム、ネオ・ナチズムの思想・運動である。かつての運動の残党を中心に、戦前体制の復活を目指す動きが、戦後間もなく起きた。しかしこの運動は、指導層も含め、構成員における戦前とのつながりが薄れていくにつれ、影響力やその性格を失っていった。

第2の現象は、1950年代後半から1970年代にかけて起きた（反福祉国家的な）「反税（tax revolt）」運動である。福祉国家がまだ十分に発達していない1950年代のフランスにおいて、商人や手工業者などの中間層による反税運動が発展し、国政でも大きな成果をあげた（プジャード運動）。また、福祉国家がすでに定着していた1970年代のデンマークとノルウェーにおいて、反税・反官僚制を掲げた両国の「進歩党」が躍進した。この動きは、1980年代に台頭する新自由主義の先取りをしていたことで注目されている。

第3の現象は、1980年代以降に躍進した政治勢力で、「ゼノフォビア」

27）　本節における新しい右派の議論と整理は、主に以下の論考を参照した。石田徹（2013）「新しい右翼の台頭とポピュリズム――ヨーロッパにおける論議の考察」高橋・石田編前掲書所収、44-69頁。吉田（2016）前掲書。

を掲げた。本稿が「現代ポピュリズム」型の右派と定義するのは、この勢力である。「現代ポピュリズム」型の右派は、新自由主義の席巻に反発するかたちで登場した。すなわち、新自由主義政策を掲げる保守勢力は、反税、反財政支出などの経済政策を重視したのに対し、「現代ポピュリズム」型の右派は、移民排斥、伝統、ナショナリズムなど、文化政策を重視した。さらに、新自由主義が経済のグローバル化の流れを作ったことに対し、「現代ポピュリズム」型の右派は、市場経済を基調としつつも、反グローバリズム、反 EU の姿勢を打ち出した。また、福祉国家を容認したが、その対象は自国民に限定するという、福祉ショーヴィニズムの主張を展開した。

それでは、この「現代ポピュリズム」型の右派が、どのように変遷してきたのか見ていこう。

「現代ポピュリズム」型の右派は、冷戦が終結するまでの時期は、「極右」勢力と似たような態度をとることもあった。すなわち、「反」体制、「反」憲法、そして「反」民主主義を前面に出し、民主的な憲法をもつ国家の基本的な価値観や、中間組織の手続きならびに制度を拒絶し、人間が平等であることを否定した。より具体的に言えば、反政党、反多元主義、法と秩序、ナショナリズム、ゼノフォビアといった、ファシズムや戦後のネオ・ファシズムが掲げた主張を共有していた。しかし、ファシズムやネオ・ファシズムは、工業化社会の矛盾から生じた運動であるが、「現代ポピュリズム」型の右派は、資本家階級と労働者階級の関係が不明確になり、激しい対立もなくなった社会で生じた「ポスト工業型（post-industrial）」の右派である。ポスト工業化社会において、既存の政治勢力にかわって台頭した「ニュー・ポリティクス（New Politics）」の反動として生じた「静かなる反革命（silent counter-revolution）」がその起源であることも、付け加えておきたい[28)]。

冷戦終結後、「現代ポピュリズム」型の右派は、特にネオ・ファシズムとの違いを強調するようになる。すなわち、「反共」路線を前面に押し出すことを避け、暴力的な直接行動やテロ行為を容認しなくなった。また、「反」憲法、「反」民主主義を掲げているわけではない。とはいえ、現行の憲法・民主主義をそのまま肯定しているわけでもない。政治的多元主義や少数者の保護など、現在の民主主義の自由主義的な側面を厳しく批判しているのである。

そして、以上のように変遷してきた「右派」勢力は、共通して、ポピュリズムの要素を含んでいた。ポピュリズムの要素とは、何よりも「人々」を主権者とみなすことである。「純粋な人々」と「腐敗したエリート」を対置させ、「人々」を「同質的なまとまり」として新たな枠組みを創り出し、移民などの外部者と明確な区別を行う。カリスマ的な指導者を立て、単純かつ直接的な言葉づかいや、派手なふるまいで「人々」の心をつかむ。また、指導部と「人々」の間の内部組織を簡略化し、両者の直接的なつながりを重要視する。さらに、政治家が多用する密室での妥協や複雑な手続きを否定することで、既存政党との差別化を図る［石田（2013）］。

ここまで、「現代ポピュリズム」型の右派の変遷を説明してきたが、なぜこの勢力が、今日のヨーロッパで台頭しているのであろうか。野田（2013）が指摘するように、ポピュリズムの台頭は民主主義の変容との関連で考察する必要がある[29]。石田（2013）は、ポピュリズムが台頭するときに共通するのは、民主主義における「実際的（pragmatic）」側面と「救済的（redemptive）」側面とのギャップが拡大したときだと述べている。すなわち、民主主義の実際的側面が過剰になり、救済的側面が過小に

28）　日野愛郎（2010）「ニュー・ポリティクス理論の展開と現代的意義――イングルハートの議論を中心に」賀来健輔・丸山仁編『政治変容のパースペクティブ［第二版］――ニュー・ポリティックスの政治学 II』ミネルヴァ書房、26-41 頁。

29）　野田昌吾（2013）「デモクラシーの現在とポピュリズム」高橋・石田前掲書所収、3-24 頁。

なったとき、ポピュリズムが台頭するのである。このことは、リベラリズムとデモクラシーの関係にも重なる。つまり、自由民主主義体制において、リベラリズムの側面が強まるほど、デモクラシーとの乖離が深まる、ということである。よって、デモクラシーのリベラルな形態である「代表民主制」が、もはや民意を十分に汲み取ることができず、機能不全に陥っている今日の先進諸国でポピュリズムが台頭するのは、当然のことだと言える。

「現代ポピュリズム」型の右派が台頭した1980年代以降、既存政党でさえポピュリズム的な手法を取り入れるケースが多く見られるようになった。よって、現代政治の「ポピュリズム化」が進んでいる、と言えるかもしれない。ポピュリズムの台頭は、それまで無視もしくは抑圧されていた問題を争点化し、硬直した政治を揺り動かすという意味で、ポジティブな面が存在する。しかし、より大きなリーダーシップに重きが置かれるため、「人々」のより多くの政治参加が軽んじられることや、同質性と一体性の強調により、異質なものが排除されがちになるという、ネガティブな面も存在する［吉田（2011）、野田（2013）］。

民主主義の変容という視点から考えると、今日の先進国では、政治的な選択肢が縮小された状況にある[30)]。多くのヨーロッパ諸国では、既存の中道左派政党も中道右派政党も、従来の政策に転換を図り、「中道」にシフトしている。中道左派勢力は、イデオロギー的な主張を抑え、（主に経済政策の面で）中道右派の政策をある程度取り入れ、現実主義路線を歩むようになった。イギリスのブレア政権（労働党）、ドイツのシュレーダー政権（社会民主党）の政策がその典型的な例である。また、中道右派勢力

30）　この点については、以下を参照。Chantal Mouffe（2005）*On the Political*, London: Routledge.［シャンタル・ムフ（2008）『政治的なものについて――闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』（篠原雅武訳）、明石書店。］マイケル・ブローニング（2016）「ヨーロッパにおけるポピュリズムの台頭――主流派政党はなぜ力を失ったか」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2016年7月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、44-49頁。

も、主に社会・文化の領域で左派的な要素を取り入れている。ドイツのメルケル政権（キリスト教民主同盟）がその典型例で、難民の受け入れを許容し、徴兵制を廃止するなど、従来の保守路線とは一線を画す政策を進めている。このように、中道左派・中道右派の両勢力が中道にシフトしたことで、政策的な選択肢が縮小している。そのため、有権者は自らの政治的不満を表出する回路が奪われたような感覚に陥る。これが原因で有権者の目には、「現代ポピュリズム」が、既存の政治勢力とは異なる、別の政治的オルタナティブを提示しているように映るのだ。

政治的な選択肢が縮小された状況にもかかわらず、既存政党はあたかも政策的な論争を繰り広げているかのように、指導者のリーダーシップや実行力を前面に押し出し、選挙戦で激しい舌戦を繰り広げている。このような選挙戦を通じて、有権者は政治への期待を高めるが、政策的な競争と切り離された政治は、必ずしも有権者が求めている政策転換を伴わないので、その期待は失望に変わる。この失望感も、有権者が新しいオルタナティブを欲する要因になる［野田（2013）］。

グローバル化の進行やポスト工業化の状況にある今日において、社会の個人化・不安定化が進み、何が自分たちの集合的な利益なのか、判断がつきにくい状態になっている。何か問題が生じたとき、かつてのように、それは特定の階層・階級の問題としてではなく、個人の問題として扱われる。よってその問題は、集団的には代表不可能な個々の問題となり、社会連帯の基盤が崩れると同時に、「代表する者」と「代表される者」との関係が断絶され、時には恣意的にもなる。既存政党が「人々」の期待を裏切っている側面もあるが、より重要なのは、「人々」にとって自分が置かれた現状の把握が困難で、どのような政策が必要なのか判別できないことである。

現状を把握することが困難な状況で、自分の利害を主張する言説をもたない人々は、ポピュリズム勢力によって、自らの利害を認識させられ、言

説を与えられることによって、（ポピュリズム勢力が言うところの）（普通の）「人々」になる。つまり、新たな線引きが行われ、「人々」という枠組みが創られるのである。ここで注意すべき点は、「代表される者」が先に存在しているから、「代表する者」がその後に登場するというわけではないことである。実際にはその逆で、まず「代表する者」が存在し、それを選ぶことで「代表される者」が形成されるのである。ラクラウによれば、ポピュリズムは特定の階層のイデオロギーに還元できるものではない。ラクラウは、社会に存在している「人々」の特殊性や個別性に共有が可能な理論を提供し、新たな普遍性をもたらすことが、ポピュリズムの本質だと指摘する[31)]。

政治的な選択肢が狭まってきている今日、民主主義がその構成要素である「人々」を代表するためには、現状を読解できない「人々」を政治的に再構築していかなくてはならない。民意は、あらかじめ定められているものではなく、その時々の状況に応じて変化するものである。この変化しやすい民意に輪郭をつけようとするのがポピュリズムである。よって、ポピュリズムは「人々」の性質や要求に基づいて「代表する者」になるわけではなく、社会の様々な要求をまとめあげ、一体的な民意を創り上げるのである［野田（2013）、吉田（2011、2016）］。

4.「現代ポピュリズム」から見た「ポデーモス」

ここまで、今日の、特にヨーロッパで台頭している「現代ポピュリズ

31）　ラクラウのポピュリズムの見解に関しては、以下を参照。Ernesto Laclau（2005）*On Populist Reason,* New York: Verso; Id.（1977）*Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism, Fascism, Populism,* London: NLB.［エルネスト・ラクラウ（1985）『資本主義・ファシズム・ポピュリズム――マルクス主義理論における政治とイデオロギー』（横越英一監訳）、大村書店。］山本圭（2016）『不審者のデモクラシー――ラクラウの政治思想』岩波書店。

ム」型の「右派」について考察してきたが、スペインのポデーモスも、「現代ポピュリズム」に位置づけることができるのだろうか。その答えに近づくため、まずはポデーモスがどのような政党なのか、概観しよう[32)]。

ポデーモスは、ギリシャの急進左派連合と同様、反エスタブリッシュメント、反緊縮財政の立場をとっているため、一般的には、急進左派、場合によっては「左派ポピュリズム」だと説明されている。またポデーモスは、その政策と手法から、21 世紀に入って台頭したラテンアメリカの左派政権、特にベネズエラのチャベス政権が主導した「ボリーバル革命（Revolución bolivariana）」と重ねて語られることも多い[33)]。しかし、チャベスの影響は少なからず受けているとはいえ、ポデーモスは独自の運動である。

ポデーモスは、市民の政治への声をしっかりと汲み上げることを目的にした、市民運動の延長線上の組織である。スペインの有権者は、サパテーロ PSOE 政権（2004～11 年）やラホイ PP 政権（2011～15 年）が実行してきた政策の性格上、グローバル化の進行による新自由主義の席巻と、EU による緊縮財政路線が唯一の道で、他の選択肢は存在しない、と受けとめる傾向にあった。ポデーモスは、このような閉塞した状況を打破し、人々の無力感を克服することを念頭に置いている［野上（2015）］。

ポデーモスの基礎となったのが「15M 運動[34)]」（2011 年 5 月 15 日）である。これは、新自由主義政策の結果、社会から疎外された人々の運動と

32）　ポデーモスについては、主にスペインの新聞報道と以下を参照。Pablo Iglesias（2015）; Id.（2014）　*Disputar la democracia: Política para tiempos de crisis*, Madrid: Akal; John Müller（coord.）（2014）*#Podemos: Desconstruyendo a Pablo Iglesias*, Barcelona: Deusto; 野上和裕（2015）「ポデモス擡頭のスペイン政治における意味」『法学会雑誌』（首都大学東京）56（1）、193-227 頁。

33）　*Vozpópuli*, 11 de julio de 2014; オマー・G・エンカーナシオン（2015）「スペインを席巻するポデモスの正体――急進左派思想と現実主義の間」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2015 年 3 月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、91-97 頁。

34）　Movimiento de 15M（キンセ・デ・エメ運動）：2011 年 5 月 15 日、「今こそ真の民主主義を！」というスローガンのもと、市民が反緊縮を訴え、マドリードのプエルタ・デル・ソル広場を約 2 か月間、占拠した運動。マドリードの座り込みをきっかけに、スペイン各地に運動が広がっていった。なお、この 15M 運動は、ウォール街占拠運動（2011 年 9 月）など、世界各国に広がった「～を占拠せよ！」という運動のさきがけになった。

して発生したもので、特に、経済危機で大きな負担を強いられている層が中心になった。スローガンとして掲げられたのは、非正規雇用や失業の拡大、住宅問題、経済の悪化を批判するもので、中央政府に対してというより、先述の諸問題を実際に扱う州政権に対する抗議行動だった[35)]。

15M 運動は、非政治的な性格を保持した運動だった。というのも、参加者は左右の政治勢力の対立に巻き込まれることを警戒し、党派や労働組合の主張が持ち込まれないように注意を払ったのである［Iglesias（2015）、野上（2015）］。また、最後まで明確なリーダーが定められなかったため、自然発生的かつ非組織的な性格が維持された運動だったとも言えるだろう。

ポデーモスの後のリーダーたちは、15M 運動に直接関わっていたわけではなかった。IU とは異なり、ポデーモスは 15M 運動を政治的に利用することは控えた。ポデーモスは自らを左翼や右翼ではなく、人々と連帯する「ポスト・イデオロギー政党」だと定義している。さらに、彼らは 15M 運動を無条件に賞賛してもいない。15M 運動は短期的には逆効果であるし、この運動が革命を起こすわけでもないので、すぐに政権交代にはつながらない、という見解が示された［Iglesias（2014）］。実際、2011 年の統一地方選挙にも総選挙にも、この運動はそれほど影響を与えず、二大政党はまだ多くの有権者の支持を得ていた（総選挙に関しては、巻末の表を参照）。先述の通り 15M 運動は、堅固な組織をもたない自然発生的な運動だったため、継続性に欠け、政治レベルでは大きな影響力を及ぼすことができなかったのである。このような運動の限界を克服するものとして、「ポデーモス」が結成された。

ポデーモスの執行部は、主に大学教授などの知識人で構成されている。IU や PSOE のように、労働運動や学生運動の活動家から政治家に転身し

35） なお、15M 運動は右派の政治家や評論家などから批判の対象になった。その点に関しては、以下を参照。Müller（coord.）（2014）*#Podemos*, pp. 59–70.

た者はいない。代表のイグレシアスは、その中でも強いカリスマ性をもち、党内で傑出した存在になっている。しかしポデーモスは、知識人による「上からのポピュリズム」と言えるのだろうか。イグレシアスは、しばしばスピーチの内容や言い回しが過激なため、攻撃的なイメージが生じ、無責任な扇動家に見られてしまう傾向にある[36)]。このことが、ポデーモスがポピュリズムと結びつけられる要因になっているようにも思われる。しかし、後述する通り、ポデーモスの実際の政策は、イグレシアスの激しい言説と比較して、穏健的なものである。また、イグレシアスは自分が固定された指導者とは認めておらず、いつでも交代可能であることを強調している[37)]。執行部と一般党員の関係性について触れると、ポデーモスは党内投票によって役職や候補者を選ぶことを徹底させている。また、書記長は一般党員の選挙によって選ばれなければならない。さらに、書記長が推薦した他の候補者への信任投票も行われなければならないことになっている［野上（2015）］。

ここで、ポデーモスが反エスタブリッシュメント政党だとされる理由を説明しよう。ポデーモスは、今日のスペインの経済格差や貧困の問題を、新自由主義的な緊縮政策に求めている。というのも、経済格差を助長する民間企業（特に金融機関）の利益の擁護が、公的な政策で推進されてしまうからである。ポデーモスによれば、この緊縮策は、政府と大企業や金融機関の人事慣行（たらい回し）によって支えられているという。よってポデーモスは、政府と財界の癒着を排除し、民主主義への原則に立ち返ることを目指しているのだ。ポデーモスは、既得権益を守り、格差を拡大させてしまうこともいとわない政界や財界の者たちを「特権階層」と位置づける。「特権階層」から一般市民の手に政治を取り戻すことができて初めて、

36）　*ABC*, 27 de octubre de 2015; *Ibid.*, 18 de octubre de 2016.
37）　*El País*, 19 de octubre de 2014.

経済政策も変えられると考えているのだ［Iglesias（2014）］。

またポデーモスは先述の通り、緊縮策が唯一の道で、それ以外の選択肢はない、という閉塞感を払拭しようとしている。財政赤字は健全なものではない。政治操作によってこのような考え方が流布され、ケインズ的な経済政策の選択肢が排除され、緊縮策が余儀なくされている。このような状況でポデーモスは、経済政策には「他の選択肢も存在する」ことを一般の人々に認知させようとしているのだ。ここで重要なのは、ポデーモスは緊縮策に代わる具体的な経済政策を追求して提示するよりも、複数の政策の選択肢を認知させ、人々に議論する機会を提供することに重きを置いていることである[38]。この点に関して、ポデーモスを、多元性を否定し、同質的なかたまり（「人々」）を創り出す「現代ポピュリズム」に位置づけてよいのであろうか。

ここから、ポデーモスの具体的な政策を見ていこう。先述の通り、党内運営に関してもポデーモスは、直接民主制を追求しているような印象を抱かせる。しかし、実際には政党を軸においた代表民主制を志向している。政治改革としては、選挙改革をしようとしている。現行の選挙制度は概して、既存の二大政党に有利で、少数派政党には不利なものとなっているからである。この点に関して、ポデーモスの提案は、一部を除けば過激なものではない。イグレシアスの言動が「過激」に見えてしまうのは、「1978年体制の解体」「憲法改正」という言葉が用いられるからである。というのも、選挙規定が1978年憲法で定められているため、選挙法の改正だけでは対処できないのである［野上（2015）］。

経済改革に関して、ポデーモスが結成当時に主張していたのは、以下のものである。ユーロ危機の際の、EUからの財政支援債務の帳消し、年金

38）ポデーモスの活動や、その下部組織にあたる「シルクロ（Círculo）」を取材した、以下のルポルタージュが、この点に関して参考になる。工藤律子（2016）「スペイン市民運動15M誕生5周年――『怒れる者たち』は政治を変えたのか？」『世界』885（2016年8月号）、岩波書店、272-279頁。

支給開始年齢の引き下げ（ユーロ危機以前の 60 歳に）、全国民へのベーシック・インカムの導入。これらは確かに、一般的に「極左」「ポピュリスト」と呼ばれている者たちが行うような「バラマキ」と捉えられるかもしれない。しかし、2014 年の欧州議会選挙の綱領を作成するとき、これらの主張は削除された。

野上（2015）が指摘しているように、ポデーモスが実際に掲げている経済政策は、福祉国家や労働者保護と結びついた社会民主主義に近い政策である。イグレシアスは、北欧の社会民主主義体制をモデルにすると主張している。ただし、ポデーモスが結成当初に掲げた主張を撤回し、現在の徹底した社会民主主義を掲げている背景には、イグレシアスの党内掌握が順調に進み、反資本主義グループの影響力が低下していることも、考慮されなければならない。

この意味でポデーモスの主張は、従来の左派とほぼ変わりはない。先述の通り、ヨーロッパの左派政党は、「第三の道」を提唱したブレア英政権のように、新自由主義的な政策を追従し、従来の「左派」とは言えない政策を推し進めることも多くなった。「中道左派」と呼ばれている勢力でさえ、場合によっては「中道右派」「左派の要素はない」政策を実行することもあり得る時代である。そのため、従来の左派が追求した政策をポデーモスが掲げただけでも、「極左」「（バラマキの）ポピュリスト」とされてしまうのだ。

ポデーモスは、従来「極左」とされてきた勢力よりも、穏健で柔軟な態度をとっている。ポデーモスは、「現代ポピュリズム」型の右派と同様に、暴力主義とは一線を画した非暴力主義を主張する。さらに、EU を積極的な意味で発展させることには賛成している。ポデーモスが「反 EU」と見なされるのは、あくまで EU が求める緊縮財政政策に強く反対しているからである。またポデーモスは、イギリスの離脱派ように、EU からの脱退

を志向するわけではない。

筆者は第1節「スペイン再総選挙（2016年6月26日）」で、ポデーモス、チャベス政権、ブレグジットが有権者のなかで重なり、ポデーモスのイメージがいっそう悪いものになったことに触れた。ポデーモスは、カタルーニャなど諸地域の自己決定権を擁護し、分離独立の是非を問う住民投票を実施することに賛成している。とはいえ、これは「現代ポピュリズム」の「左派」にあたるチャベス政権が手法として用いた「バラマキ」や、国民投票、および様々な選挙を駆使して民意をくみ取ろうとする直接民主制と、同じものだと考えてよいのだろうか。

今日、「国民投票」の効用は、想定外の結果が出ることが多いので、疑問視されている。イギリスのEU離脱の是非を問う国民投票や、コロンビアで実施された政府とFARC（コロンビア革命軍）との和解合意の是非を問う国民投票（2016年10月2日）の結果が、そのような傾向を示している。カタルーニャの分離独立に反対しているポデーモスが、「現代ポピュリズム」に位置づけられるチャベス政権のような「バラマキ」を志向して、想定外の結果が出やすい国民投票を用いようとしているとは考え難い。

最後に、ポデーモスによる、代表民主制のあり方を考察すれば、「現代ポピュリズム」とポデーモスの関係が、より明確になるだろう。従来の代表民主制は、さまざまな経済利害を代表する団体や財界、労働組合などの間の調整で、政策が決定されている。ポデーモスは、市民の多様なネットワークをつないでいく過程で発展してきた政治組織である。そのため、ポデーモスは下からの積み上げによる、利害を調整する団体として存在するのではなく、多様な運動体の独自性を尊重し、互いの情報を可能な限り公開している。ポデーモスが目指しているのは、ポデーモスが展開する運動を通して様々な人々が政治の意味を形成し、そこで共有できるスローガン

を発見することである。これは、特定の階級の利害を代表する運動ではなく、新たな政治的利害を作り上げていく運動なのだ。ただし、繰り返しになるが、ポデーモスが重視するのは具体的な政策を提示することではなく、人々に議論の場を提供することである。（一方的に）「人々」を創り上げ、「人々」の同質性を重視して多元性を否定するポピュリズムとは、この点で相容れない。この意味でポデーモスは、従来の代表民主制における中間組織や「現代ポピュリズム」の要素はある程度は含みつつも、両者とは異なる「新たな中間組織」「現代型の中間組織」だと位置づけられることができるのではなかろうか。

おわりに

本稿は試論であるが、一般に「左派ポピュリズム」と説明されるスペインの新しい政治勢力であるポデーモスを「現代ポピュリズム」に位置づけることができるのかについて、考察してきた。本稿で明らかになった論点をまとめておきたい。

2016 年 6 月に行われたスペイン再総選挙では、前年の総選挙（2015 年 12 月）と同様、既存の二大政党が後退し、既存政党や既成の体制を批判し、市民運動に起源をもつ新しい政治勢力が台頭した。ポデーモスは、既存の左翼勢力である統一左翼（IU）と「ウニードス・ポデーモス」という選挙連合を結成して、2016 年の再総選挙に臨んだ。ウニードス・ポデーモスは、事前の予想では PSOE を追い抜き、第 2 党になることが濃厚だった。しかし、再総選挙の 3 日前に行われたイギリスの EU からの離脱を問う国民投票で、予想に反して離脱派が勝利した。この結果はポデーモスを不利にさせた。スペインからの分離独立の動きを強めているカタルーニャなどの諸地域の自決権を擁護し、独立の是非を問う住民投票の実施を

擁護するポデーモス、イギリスの離脱派、そして、国民投票を多用する手法をとって成功したベネズエラのチャベス政権のイメージが、多くの有権者のなかで重なったのだ。そのため、ウニードス・ポデーモスはPSOEを追い抜くことができず、前年の総選挙と同じ、第3党にとどまった。

ポデーモスのように、既存政党と既成の体制を批判して台頭している政治勢力は、ポピュリズムという枠組みで説明される傾向にある。ポピュリズムの歴史を概観すると、歴史的先例のポピュリズムと「現代ポピュリズム」には、違いがあることが分かった。歴史的先例のポピュリズムは、特定の階層・階級やイデオロギーに基づいて「人々」の支持を集めようとした。一方「現代ポピュリズム」は、社会の個別化・不安定化が強まり、現状の把握が困難な状況で、新たに線引きを行い、「人々」という枠組みを創り出す。

近年、特にヨーロッパで台頭している「現代ポピュリズム」型の「右派」は、新自由主義的な経済政策よりも、「ゼノフォビア」、ナショナリズム、福祉ショーヴィニズムなど、文化社会政策を重視している。また、この勢力は冷戦終結後、それまで前面に掲げていた「反共」路線、「反」憲法、「反」民主主義を放棄し、暴力的な直接行動やテロ行為を容認しなくなった。ただし、「現代ポピュリズム」型の右派は、現行の憲法や代表民主制をそのまま肯定しているわけではない。

「現代ポピュリズム」の台頭は、民主主義の変容という観点から考察することで、理解が一層容易になった。今日の先進国の中道左派・中道右派政権は、従来の政策を転換し、「中道」にシフトしている。政策の選択肢が狭まり、有権者は自らの不満を表出する回路が奪われたという感覚に陥っている。そのため、有権者の目には、「現代ポピュリズム」が既存の政治勢力とは異なる、別の政治的オルタナティブを提示しているように映る。

グローバル化の進行や、「ポスト工業化」の状況にある今日の世界では、何が自分たちの集合的な利益であるのか、判断がつきにくい状況になっている。「現代ポピュリズム」は、社会の様々な要求をまとめ上げて新たに線引きを行い、「人々」という同質的なかたまりを創り出し、一体的な民意を表出させる。ここで重要なのは、「代表される者」が先に存在しているのではなく、まず「代表する者」が存在し、それを選ぶことで「代表される者」が形成されることである。

以上のことをふまえ、本稿は、ポデーモスが「現代ポピュリズム」に位置づけられるかどうかを考察した。筆者は、この試論の段階では、ポデーモスは従来の代表民主制における中間組織や「現代ポピュリズム」の要素を、ある程度は含みつつも、両者とは異なる「新たな中間組織」もしくは「現代型の中間組織」と位置づけることにした。

ポデーモスが最も重視していることは、政治的な選択肢が狭まり、閉塞感が漂っている現代において、複数の政策が存在することを認知させ、「人々」に議論をする機会を提供することである。ポデーモスは、市民の多様なネットワークをつないで発展してきたので、下からの積み上げによって利害を調整する組織ではない。また、多様な運動体の独自性を尊重し、互いの情報を可能な限り公開している。この意味でポデーモスは、従来の代表民主制において、各団体の利害を調整する中間団体とは異なる。

そして、繰り返しになるが、ポデーモスが目指しているのは、様々な人々が、ポデーモスが展開する運動を通じて政治の意味を形成し、そのなかで共有できるスローガンを発見することである。よってポデーモスは、特定の階級・階層やイデオロギーを代表する運動ではなく、現状の政治的利害は何であるのかを参加者全員で考え、それを見出していこうとする運動なのだ。この点でポデーモスは、（一方的に）線引きをして「人々」を創り上げ、その「人々」の同質性を重視し、多元性を否定する「現代ポ

ピュリズム」とは相容れない。

またポデーモスには、しばしば同一視されるベネズエラのチャベス政権とも異なる点があることが分かった。ポデーモスは、あくまでカタルーニャなど諸地域の自己決定権を擁護するという意味で「住民投票」を容認している。カタルーニャの分離独立に反対しているポデーモスが、イギリスの EU からの離脱を問う国民投票のように、想定外の結果が出やすい「国民投票」を、「バラマキ」という意味で利用することは考え難いのだ。

ポデーモスは、結成当初に掲げていた政策を、より現実的な政策へ転換した。現在、ポデーモスは従来の左派が主張してきた社会民主主義的な政策を掲げている。しかし、今日の先進国の中道左派は、新自由主義的な政策に追従し、従来の「左派」とはいえないような政策を実行することも多くなった。このような状況で、ポデーモスが従来の左派が主張してきた政策を唱えただけでも、有権者はそれを極端なものだと捉えかねないのだ。そのため、ポデーモスが実際に掲げている政策に反して、「極左」「（バラマキの）ポピュリズム」とされてしまうのである。

とはいえ、ポデーモスの実像が、少しずつ有権者の目にも映るようになってきたことも指摘したい。というのも、ポデーモスが新しい政治勢力であり、ブレグジットの影響があったにもかかわらず、2016 年の再総選挙で第 3 党の位置を維持したからである。ポデーモスは、2015 年の総選挙でも、2016 年の再総選挙でも、既存の二大政党に迫る議席を獲得した。2 つの選挙の結果を見れば（巻末の表を参照）、既存の左派勢力（PSOE、IU）への批判票を取り込み、一定の支持基盤を築きつつあることも見てとれる。

ただし、ポデーモスは結党（2014 年 1 月）からあまり時間が経っていないため、まだその実態を明らかにできない点も多くあると思われる。この点は、ポデーモスとともに台頭した新しい政治勢力であるシウダダーノ

スにも言えるであろう（結党は 2006 年 3 月だが、全国的に支持を獲得するようになったのは、ここ数年である）。

新しい政治勢力（ポデーモス、シウダダーノス）の台頭によって、二大政党制（PP、PSOE）が崩壊し、政治の転換点に立つスペインがこれから進む道を、現時点で明確に予想することはできないが、本稿の課題の一つとして、今後のスペインの動向を注視していきたい。

新聞報道

ABC（27 de octubre de 2015; 18 de octubre de 2016.）

El Economista（27 de junio de 2016.）

El Mundo（5 de marzo de 2016; 5 de abril de 2016; 24 de junio de 2016.）

El País（30 de junio de 2014; 19 de octubre de 2014; 16 de mayo de 2016; 26 de mayo de 2016; 9 de junio de 2016; 24 de junio de 2016.）

El Periódico（20 de abril de 2016.）

Expansión（9 de junio de 2016.）

La Vanguardia（4 de marzo de 2016; 5 de abril de 2016.）

Vózpopuli（11 de junio de 2014; 23 de mayo de 2016.）

参考文献

Brading, Ryan（2013）*Populism in Venezuela*, London: Routledge.

De la Torre, Carlos（ed.）（2015）*The Promise and Perils of Populism: Global Perspectives*, Kentucky: Kentucky University Press.

De la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson（eds.）（2013）*Latin American Populism in the Twenty-First Century*, Washington D.C.: Woodrow Wilson Center Press.

Grattan, Laura（2016）*Populism's Power: Radical Grassroots Democracy in America*, Oxford: Oxford University Press.

Hawkins, Kirk A.（2010）*Venezuela's Chavismo and Populism in Comparative Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.

Iglesias, Pablo（2014）*Disputar la democracia: Política para tiempos de crisis*, Madrid: Akal.

――――――（2015）*Una nueva Transición: Materiales del año del cambio*, Madrid: Akal, 2.ª edición.

Laclau, Ernesto（1977）*Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism, Fascism, Populism*, London: NLB.［エルネスト・ラクラウ（1985）『資本主義・ファシズム・ポピュリズム――マルクス主義理論における政治とイデオロギー』（横越英一監訳）、大村書店。］

――――――（2005）*On Populist Reason*, New York: Verso.

Mouffe, Chantal（2005）*On the Political*, London: Routledge.［シャンタル・ムフ（2008）『政治的なものについて――闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』（篠原雅武訳）、明石書店。］

Müller, John（coord.）（2014）*#Podemos: Deconstruyendo a Pablo Iglesias*, Barcelona: Deusto.

Taggart, Paul（2000）*Populism*, Buckingham: Open University Press.

Wodak, Ruth, Majid KhosraviNik and Brigitte Mral（eds.）（2013）*Right-Wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, London: Bloomsbury.

石田徹（2013）「新しい右翼の台頭とポピュリズム――ヨーロッパにおける論議の考察」高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー――ヨーロッパからの考察』法律文化社、44-69 頁。

エンカーナシオン，オマー・G（2015）「スペインを席巻するポデモスの正体――急進左派思想と現実主義の間」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2015 年 3 月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、91-97 頁。

小倉英敬（2012）『マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレ――1920 年代ペルー社会思想史試論』新泉社。

カジン，マイケル（2016）「アメリカにおけるポピュリズムの歴史――ポピュリズムと政治的進化」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2016 年 11 月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、16-25 頁。

加藤伸吾（2016）「2015 年 2 つの選挙に見るスペイン政治とカタルーニャ政治の連関形態の変容」『EUSI Commentary』vol. 68（2016 年 2 月 10 日）。

工藤律子（2016）「スペイン市民運動 15M 誕生 5 周年――『怒れる者たち』は政治を変えたのか？」『世界』885（2016 年 8 月号）、岩波書店、272-279 頁。

ザカリア，ファリード（2016）「トランプ後もポピュリズムは続く――なぜ欧米でポピュリズムが台頭したのか」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2016 年 11 月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、6-15 頁。

遅野井茂雄・宇佐見耕一編（2008）『21 世紀ラテンアメリカの左派政権――虚像と実像』アジア経済研究所。

新津吉太郎（2016）「現代スペインにおける政治変化――スペイン総選挙・地方選挙（2015 年）の結果分析」『人文研究』（189）、神奈川大学人文学会、131-166 頁。

野上和裕（2015）「ポデモス擡頭のスペイン政治における意味」『法学会雑誌』（首都大学東京）56

(1)、193-227 頁。

野田昌吾（2013）「デモクラシーの現在とポピュリズム」高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー――ヨーロッパからの考察』法律文化社、3-24 頁。

日野愛郎（2010）「ニュー・ポリティクス理論の展開と現代的意義――イングルハートの議論を中心に」賀来健輔・丸山仁編『政治変容のパースペクティブ［第二版］――ニュー・ポリティクスの政治学 II』ミネルヴァ書房、26-41 頁。

ブローニング，マイケル（2016）「ヨーロッパにおけるポピュリズムの台頭――主流派政党はなぜ力を失ったか」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2016 年 7 月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、44-49 頁。

松下冽（1993）『現代ラテンアメリカの政治と社会』日本経済評論社。

松下洋（1987）『ペロニズム・権威主義と従属――ラテンアメリカの政治外交研究』有信堂。

ムッデ，カス（2016）「ポピュリズムを台頭させた欧州政治の構造的変化とは――難民危機、経済危機はトリガーにすぎない」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（2016 年 11 月号）、フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、26-33 頁。

山本圭（2016）『不審者のデモクラシー――ラクラウの政治思想』岩波書店。

吉田徹（2011）『ポピュリズムを考える――民主主義への再入門』NHK 出版。

――――――（2016）「ポピュリズムとは何か――民の声は神の声（Vox Populi, Vox Dei）？」杉田敦編『グローバル化のなかの政治』岩波書店、103-125 頁。

表

スペイン総選挙

（下院：定数 350、過半数 176、2016 年の議席数順に配列）

投票年月日	**2016. 6. 26**	**2015. 12. 20**	**2011. 11. 20**
政党略称	得票数（得票率） 議席数	得票数（得票率） 議席数	得票数（得票率） 議席数
PP	7,906,185（33.03%） 137	7,215,530（28.27%） 123	10,803,693（44.62%） 186
PSOE	5,424,709（22.66%） 85	5,530,693（22.01%） 90	6,973,880（28.73%） 110
Podemos	5,049,734（21.10%） 71	5,189,333（20.66%） 69	
C's	3,123,769（13.05%） 32	3,500,446（13.93%） 40	
ERC	629,294（2.63%） 9	599,289（2.39%） 9	256,393（1.05%） 3
CDC	481,839（2.01%） 8	565,501（2.25%） 8	1,014,263（4.17%） 16
PNV	286,215（1.20%） 5	301,585（1.20%） 6	323,517（1.33%） 5
IU		923,105（3.67%） 2	1,680,810（6.92%） 11
EH-Bildu	184,092（0.77%） 2	218,467（0.87%） 2	333,628（1.37%） 7
CC	78,080（0.33%） 1	81,750（0.33%） 1	143,550（0.59%） 2
UPyD	50,282（0.21%） 0	153,498（0.61%） 0	1,140,242（4.69%） 5

	2016	2015	2011
BNG	44,902（0.19%） 0	70,464（0.28%） 0	183,279（0.75%） 2
Compromís			125,150（0.51%） 1
FORO			99,173（0.40%） 1
GBai	14,289（0.06%） 0	30,554（0.12%） 0	42,411（0.17%） 1

有権者総数	34,597,038	34,630,253	34,301,332
投票数（投票率）	24,161,083（69.84%）	25,349,824（73.20%）	24,590,557（71.69%）
無効票・白票の数	404,409	414,760	650,981
有効投票数	23,756,674	24,935,064	23,939,576
棄権者数	10,435,955	9,280,429	9,710,775

政権党（投票日時点）

スペイン政府	暫定政権（PP）	PP	PSOE

政権を獲得した政党

スペイン政府	PP	なし（再選挙へ）	PP

注 1：Podemos の 2016 年の数値は、IU と組んだ選挙連合「Unidos Podemos」の数値を示す。

注 2：本文に登場していない会派は、次の通りである。

- ERC（Esquerra Republicana de Catalunya）「カタルーニャ共和主義左

派」

➢ カタルーニャ・ナショナリスト政党左派。カタルーニャの「独立派」。

- CDC（Convergència Democràtica de Catalunya）「カタルーニャ民主集中」

➢ カタルーニャ・ナショナリスト政党右派。カタルーニャの「独立派」。

- PNV（Partido Nacionalista Vasco）「バスク・ナショナリスト党」

➢ バスク・ナショナリスト政党右派。

- EH-Bildu（Euskal Herria Bildu）「エウスカル・エリア・ビルドゥ」

➢ バスクとナバーラ自治州を拠点にした、急進的バスク・ナショナリスト左派の選挙連合。

- CC（Coalición Canaria）「カナリア連合」

➢ カナリア諸島の、ナショナリスト右派の選挙連合。

- UPyD（Unión, Progreso y Democracia）「連合・進歩・民主主義」

➢ 二大政党に対抗し、スペインの民主主義を刷新を掲げ、左右のイデオロギーを超えた「進歩主義」を標榜する政党（2007 年、マドリードにて結党）。

- BNG（Bloque Nacionalista Galego）「ガリシア・ナショナリスト・ブロック」

➢ ガリシア自治州の、穏健的なガリシア・ナショナリスト政党。

- Compromís「クンプルミース」

➢ バレンシア自治州の統一左翼（IU）、環境左派、市民団体が結成した会派。

- FORO（Foro Asturias）「フォロ・アストゥリアス」

➢ アストゥリアス自治州の地域主義政党右派。

- GBai（Geroa Bai）「ゲロア・バイ」
  - ➢ ナバーラにおけるバスク・ナショナリスト左派の選挙連合。

出典：スペイン内務省と *El País* 紙のデータに基づき筆者作成。